

インクルーシブな社会に向けて

遠藤 智子

東日本大震災の年から「よりそいホットライン」という24時間年中無休の電話相談を実施している。1日の電話数は3万件。相談につながった件数は年間で25万件を超える。1年間で相談票を4千枚ほど読むが、「記録」から聴こえてくるのは、とてつもない孤独に悩む声である。

震災で家族を失い他県の旅館に住み込みで働く10代の女性。虐待に遭いリストカットがやめられない少女。職場のいじめがひどくて涙が止まらなと話していた青年。もう食べるものがない、電気も止まったと老夫婦から。結婚の圧力に悩む同性愛者の男性。性暴力被害を受けて自殺しようとするビルの屋上からの電話。「生きるのがつらい」人々が現在の日本にこんなに多いとは、この相談を始めるまで本当にはわからなかった。相談者は共通して自尊感情が低く自責の念も強い。「私が悪かったからこんな状況に。どうしたらいいかわからない」。そう思い、誰にも相談できず匿名で電話してくる。まさに「社会的排除という暴力」を受けて孤立させられている状態だ。

では、どのような仕組みがあれば、つらい人が楽になるインクルーシブな社会に向かうのだろうか。実は現状でも「使える」システムはたくさんある。しかし、独りぼっちでは「(相談窓口)にたどり着けない」。生活困窮者自立支援法に盛り込まれてはいるが、つらい時に一緒に歩いてくれる人(問題を整理して通訳してくれる人)を「行政サービス」として頼むことができたなら効果的ではないだろうか。

その時に支援する側が試される。時代は変化し困りごとは多様になった。旧弊な家族観やジェンダーバイアスがあっては相談者のニーズに合わせることができない。実際に多くの相談窓口で、性暴力被害やセクシュアリティの相談での二次被害が報告されている。求められているのは支援する側の変革だ。困っている人が「あなたは悪くない」と言ってくれる人に支えてもらえる社会にしたい。



PROFILE

えんどうともこ：(一社)社会的包摂サポートセンター事務局長。1989年より日本フェミニストカウンセリング研究会(現：NPO法人日本フェミニストカウンセリング学会)、99年より全国女性シェルターネットに参加。03年よりシェルターネット事務局長としてDV法改正に取り組む。11年内閣府事業「パープルダイヤル(24時間DV/性暴力ホットライン)」に参加。著書に『下層化する女性たち』(共著、勁草書房、2015)などがある。